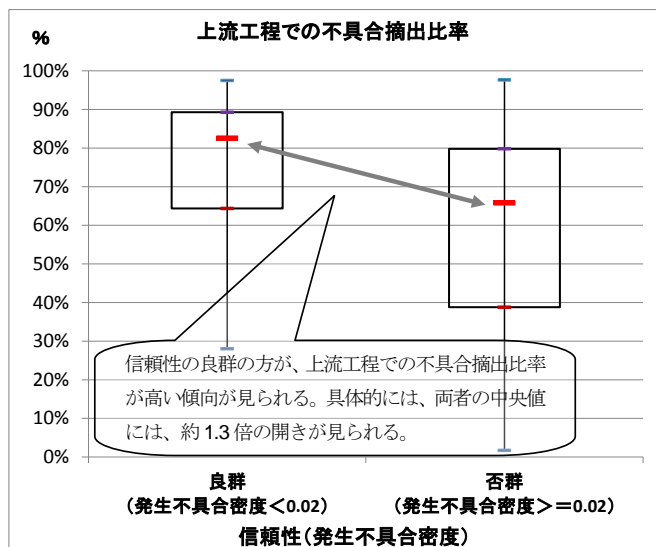
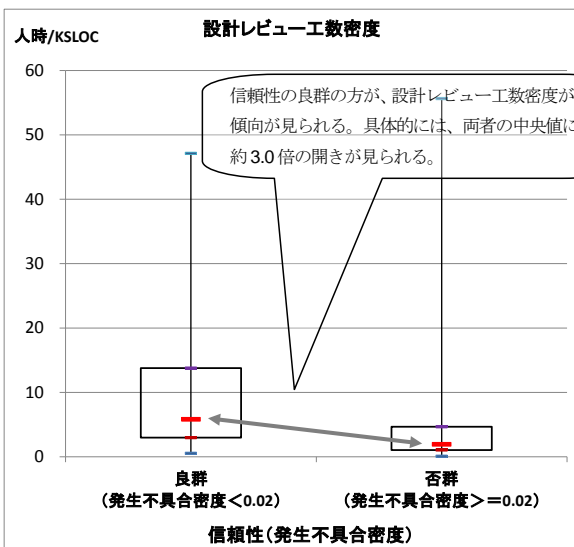


① ベスト・プラクティスは「上流工程」に注力。テスト時の不具合が少ない傾向に

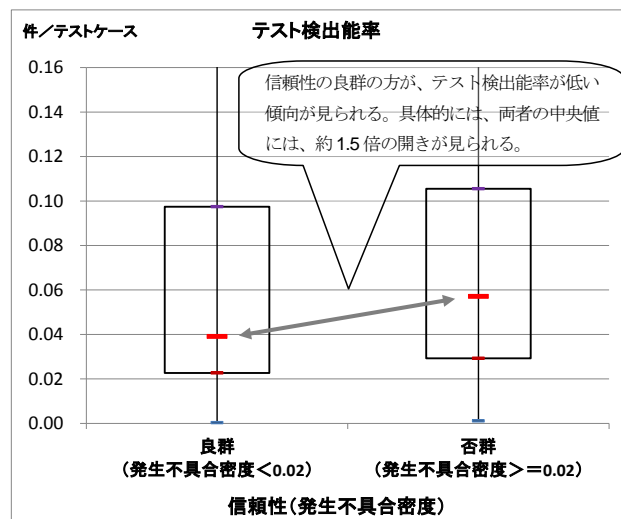
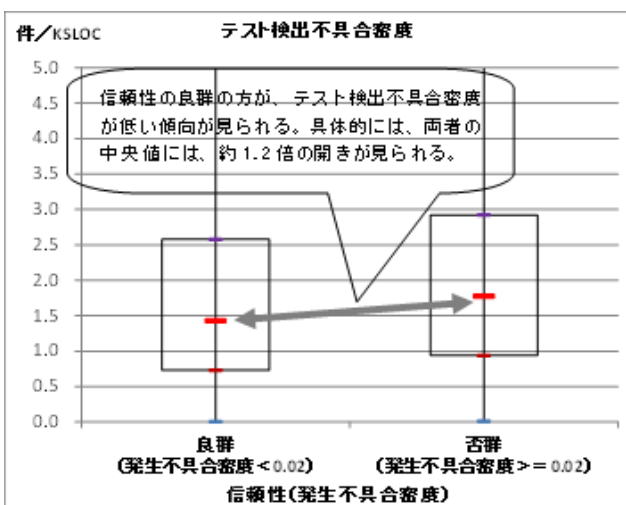
【前提条件】

開発規模（ソースコード行数）あたりの発生不具合密度（件/KSLOC⁽⁴⁾）を基に、0.02 件/KSLOC未滿を「ベスト・プラクティス（良群）」とし、比較対象（否群）を0.02 件/KSLOC 以上として検証を実施。
 （※「件/KSLOC」が低いほど、不具合が少なく信頼性の高いソフトウェア開発プロジェクト）

- ベスト・プラクティスは、設計レビュー工数密度が高く 上流工程に注力している。（中央値で約 3.0 倍）
- 上流工程での 不具合抽出比率が高い。（中央値で 1.3 倍）



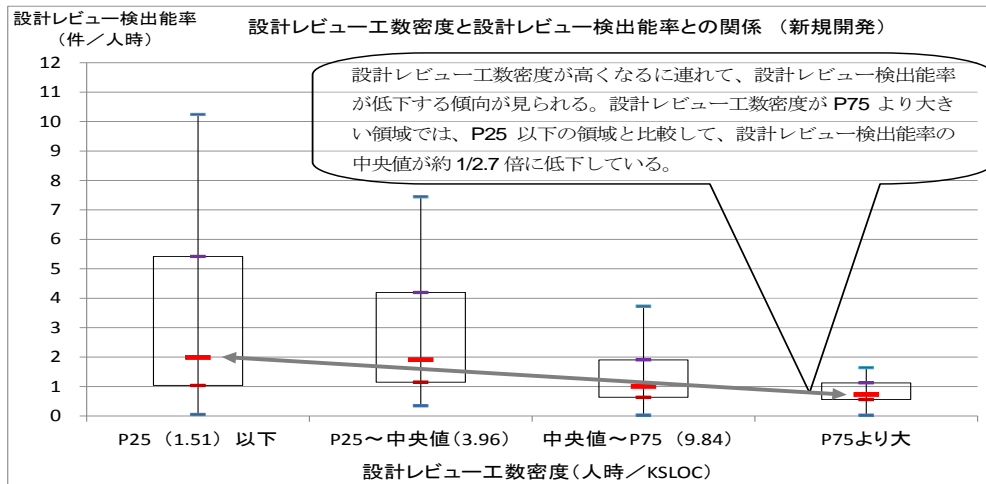
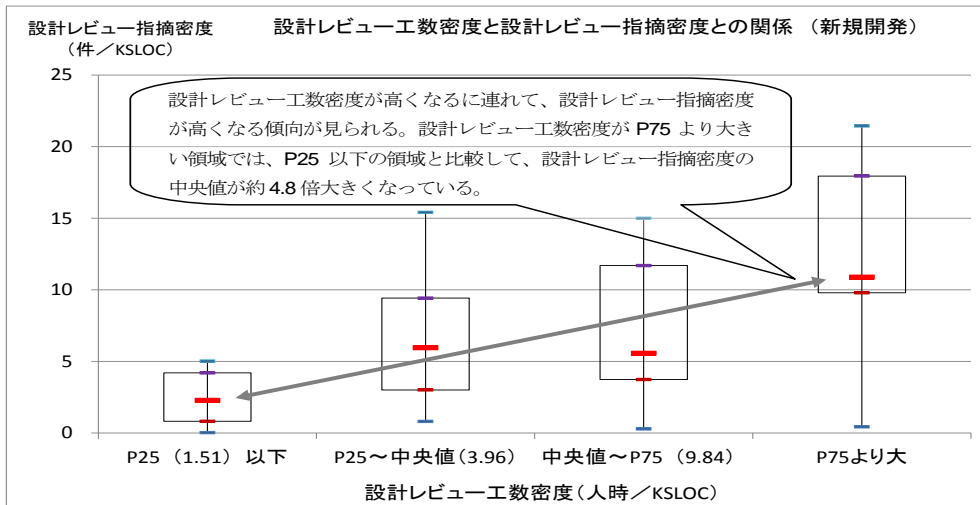
- テスト検出不具合密度が低いことから、テスト時における不具合検出が少ない。（中央値で 1.2 倍）
- テスト検出能率も低いことから、テスト時における潜在的な不具合が少ない。（中央値で 1.5 倍）



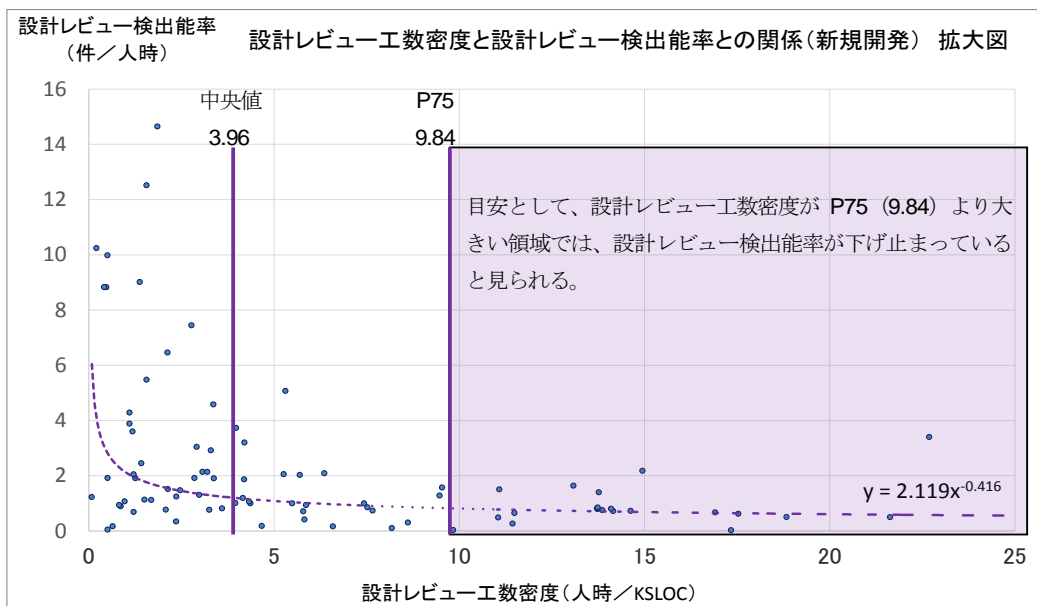
⁽⁴⁾ Kilo Source Lines Of Code : プログラムの規模を表す指標の一つ。Kは単位（キロ）を表し、KSLOCはソースコード1,000行のこと。

② 設計レビューの効果を勘案した「設計レビュー工数」のコントロールを

- 設計レビューに工数をかけるほど、検出できる不具合数など設計レビュー指摘件数が増加する
- 一方、工数をかけるほど、検出能率（設計レビュー工数当たりの指摘件数）は低下傾向に



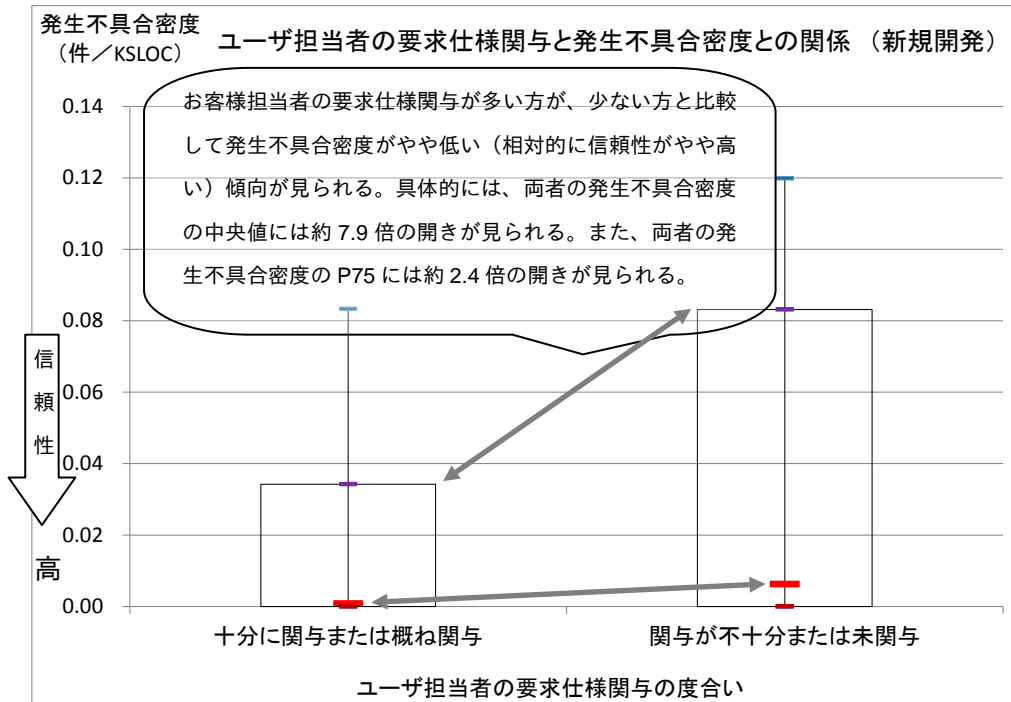
- 設計レビュー工数密度の 75 パーセンタイル値以降では検出能率が下げ止まっている傾向にあるため、自社プロジェクトの設計レビュー工数密度の 75 パーセンタイル値までを目安にレビュー実施を



③ 顧客が要求仕様に関与しているほど、生産性と信頼性が向上する傾向に

- 一般的には、ソフトウェアの信頼性を高めるための取り組みは、生産性の低下につながるとされる
- しかし、顧客の要求仕様策定に対する関与（要求仕様関与）が多いほど、信頼性と生産性が高い傾向に

■顧客の要求仕様関与が多い方が、発生不具合密度は低く信頼性が高い傾向に（中央値で約 7.9 倍）



■顧客の要求仕様関与が多い方が、生産性が高い傾向に（中央値で約 1.7 倍）

